

# 特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会 災害復興委員会 2021年度 活動報告書

## 【特集1】

令和3年熱海市伊豆山土砂災害 ————— 2  
「避難所内、庁内会議の話し合い、  
被災者同士の対話」のサポート  
～ソーシャル・ファシリテーションの視点から～

## 【特集2】

災害復興支援者のための ————— 6  
「話し合う力」養成講座  
～北海道から沖縄までの参加者が集いました！

## 【特集3】

災害復興委員会 10年のあゆみ ————— 8

## Topics

丁寧な対話（ふりかえり）をくりかえしたからこそ ————— 10  
「伝えたい言葉」が生まれる  
～ Voice from 3.11

被災地での会議のオンライン化に対応し、  
見える化のスキルを学び合う  
～オンライン記録ボランティア養成講座

災害に備えて『話し合う力』を蓄えよう！ ————— 11  
～ JVOAD 全国フォーラム分科会

防災・減災の一環として継続的にサポート  
～内閣府「多様な主体間における連携促進のための研修会」

2021年度活動一覧 ————— 12



## 【特集1】令和3年熱海市伊豆山土砂災害 「避難所内、庁内会議の話し合い、 被災者同士の対話」のサポート ～ソーシャル・ファシリテーションの視点から～

災害復興支援にはさまざまな専門家が集まっていますが、  
その中でファシリテーターは何ができるのでしょうか――。

ファシリテーションを“話し合いの技法”とだけ定義すると、この問いへの解は  
ある程度は見えてきますが、本当にそれだけでしょうか。

今回は、静岡県熱海市での支援を「ソーシャル・ファシリテーション」という視点で捉え  
ファシリテーションによる災害復興支援を考えてみます。

2021年7月3日静岡県熱海市伊豆山土砂災害では、関連死1名を含む死者27名、行方不明者1名(2022年5月9日現在)という大きな被害をもたらしました。発災直後、日本ファシリテーション協会災害復興委員会(以下、FAJ)委員のひとりが、静岡県危機情報課の要請で、避難所支援に入ったことをきっかけにFAJの支援が始まりました。今回の特徴であるホテル避難所には最大で529名の住民が避難をしていました。7月7日には、避難所内で伊豆山の町内会会長、役員が集まり話し合いが始まりました。ここでは、避難所

内での困りごとが話し合われました。

避難所閉鎖後、被災された125世帯(2022年5月9日現在)がみなし仮設住宅に移ってからは、伊豆山ささえ逢いセンター運営のための話し合い、課を越えて情報共有や課題解決をするための情報共有会議、被災した地域から立ち上がった団体が主催する、被災者同士の対話の場などを支援してきました。



町内会会長、役員の話し合いの様子

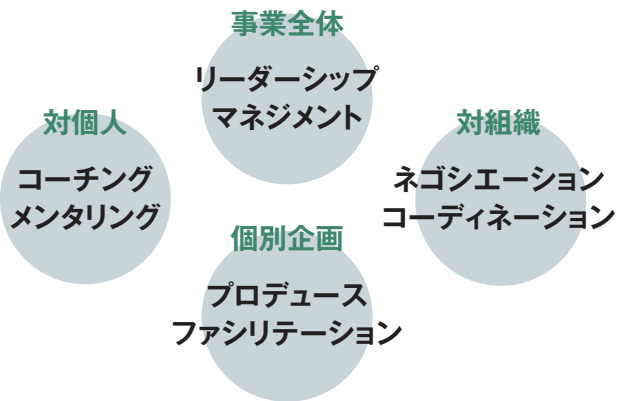
〈主な支援内容(一部抜粋)〉

フェーズ	名称	参加者	内容	場所	支援内容
7月6日 ～9月頃 応急対 策時	伊豆山町内会役員会	伊豆山町内会役員会、町内会会長、民生児童委員(避難者)、県、市職員、災害ボランティアセンター、DWAT等	避難所内困りごとを解決する話し合い	避難所	各方面との調整、交渉、場づくり、進行、可視化
	女性限定の座談会、情報交換会	避難所内の女性、県、市、社協、民生委員、ボランティア	避難所内での女性の困りごとを共有、コミュニティづくり	避難所	企画、各方面との調整、交渉、事前準備、場づくり、進行、可視化
	避難所運営に関わる話し合い(立ったままの場合が多い)	静岡県、熱海市、支援団体、町内会役員(被災者)、被災者、避難所責任者、災害ボランティアセンター等	日々、避難所で起こる困りごと、トラブルの解決	避難所、市役所、災害ボランティアセンター	各方面との調整、交渉、進行
9月頃～ 現在 復旧・ 復興対 策期	被災者のための情報共有会議	災害ボランティアセンター(途中から復興センター)、市役所各課、NPO、社協	被災者支援にかかる情報共有や調整	庁舎内会議室	各方面との調整、交渉、場づくり、進行補助、可視化など
	ささえ逢いセンター運営会議	ささえ逢いセンタースタッフ(市役所、保健師、市社協、相談員など)県社協	ささえ逢いセンター運営に関わる話し合い	ささえ逢いセンター、庁舎内会議室	各方面との調整、交渉、場づくり、議題出し、進行、可視化など
	今を話そう会(テンカラセン主催)	主に被災者、(支援者も)	今感じていること、悩んでいることなどを話す(議論にしない)	伊豆山浜会館	プログラムづくり、場づくり、進行、可視化

この支援活動にあたって、時と場合によっては、「話し合いのファシリテーション」を超えた働きかけを行いました。例えば避難所において「女性限定の情報交換会」を開催するために、チラシ案や企画書を作成して市役所の関係各課に働きかけたり、災害ボランティアセンターを運営している社

会福祉協議会と連携したり、当日の運営ボランティアを確保するために各支援団体に要請を行ったりしました。このような「話し合いのファシリテーション」を超えた働きかけをソーシャル・ファシリテーションと呼びます。(FAJ)災害復興委員会、鈴木まり子)

### 〈ソーシャル・ファシリテーション〉

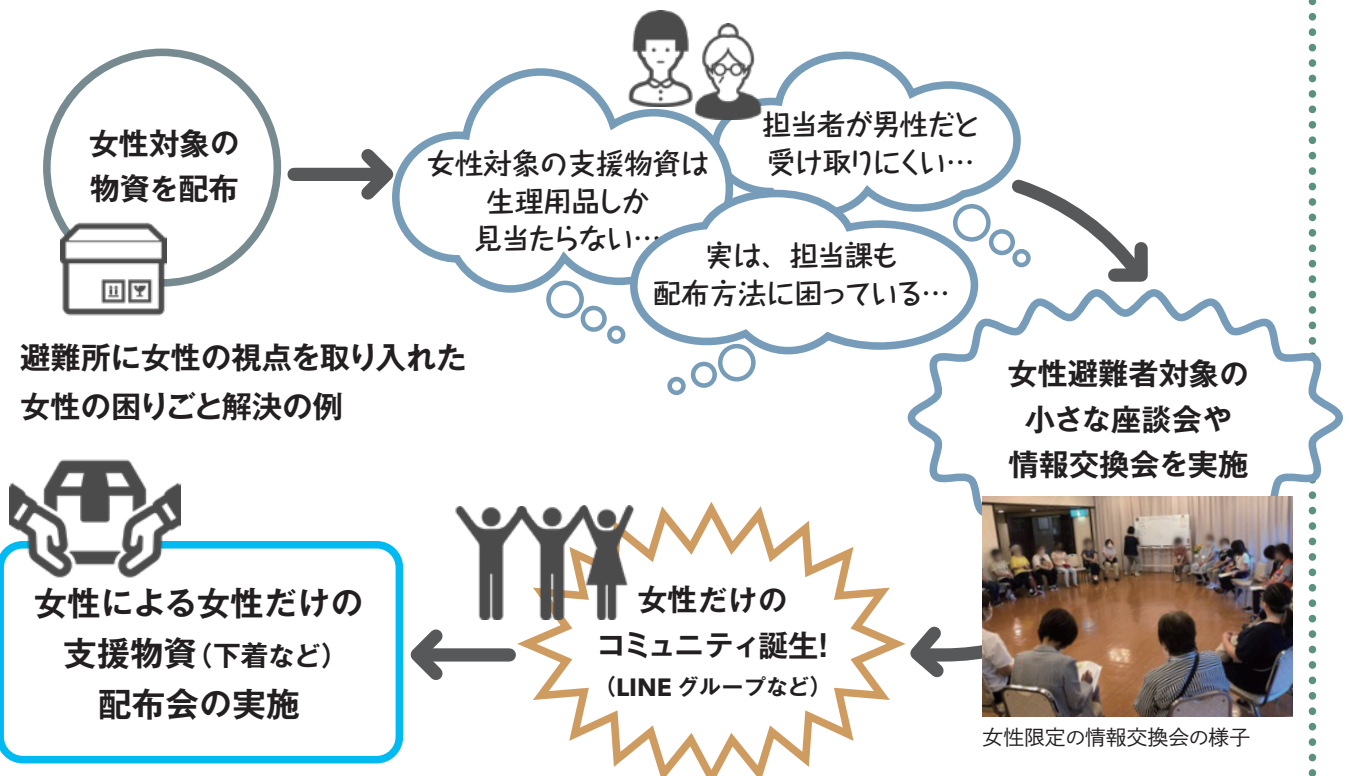


ソーシャル・ファシリテーションとは…

- ◎ 人と人とが〈支えあう〉ような関係や行為を支援・促進すること
- ◎ 社会的な課題の解決を支援・促進すること



- 基本は、〈話しあい〉のファシリテーション
- 人と人との〈つながり〉や〈かかわり〉を育むには、〈話しあい〉のあり方が重要。プラスαを考えてみよう!
- 新たな〈つながり〉や〈かかわり〉を生み出すには、コーディネートやプロデュースなどの役割も同時に担う必要あり!



## 場のレイアウトの工夫

「場」のレイアウトは、話し合いの内容や雰囲気に影響を及ぼします。基本的な考え方としては、部屋に合わせるのではなく、話し合いの目的に合わせて合わせる。



「ロの字型」(上)ではなく、全員の顔が無理なく見えるよう、「輪」になって話し合っている様子。必ずしも机が必要とも限らない(下)

し、避難所などでは、無理をしないでチャンスを活かしながら少しずつ変更するようにします。



## グループサイズの変更

話し合う際の人数(グループサイズ)によって発言のしやすさや話し合いの効果が変わってきます。例えば、ひとりで考える、ふたりでじっくり語る、4人で対話する、そして全員で一体となって…など話題や状況によって柔軟にサイズを変えます。小さいサイズであればひとりあたりの話す時間も長く確保することができます。



全員で話している様子(上)と3～4人の小グループにわかれて話している様子(下)

## 被災地での話し合いに活用できる 話し合いのファシリテーション・スキル

どのような状況でも、話し合うことで人と人が繋がり、新しい何かが生まれます。

ここでは、熱海市復興現場での“話し合いのファシリテーションスキル”の一例をご紹介します。

### チェックイン

チェックインとは、話し合い冒頭にひとりずつ順番に話すこと。「今の気分」や「私の近況」など、思い思いに話してもらいます。早いタイミングで全員がひとこと口を開く機会となり、話しやすい雰囲気づくりに効果的です。災害復興時の話し合いのチェックインでは、無理して明るい話題ばかりでなく、辛い気持ちを率直に話すこともあります。

チェックインの時は、話している人に全員が意識を向け、しっかりと耳を傾ける様子が見られる

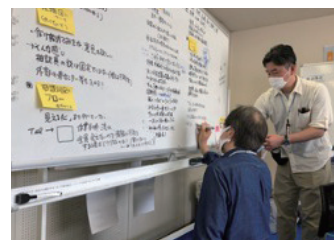


### 話し合いの“見える化”

話し合っている内容が、ほぼ同時に目の前で文字になって全員で見えるようになると話し合いの流れが掴めたり、さらに、もっと討議すべきポイントが見えてきます。また、議題やグラウンドルールなどは事前に書いておき本番に臨むと、進行がスムーズになります。

太めの水性ペン、ホワイトボードマーカー、付箋、A4コピー紙など用意しておく便利です。

話し合いの様子をホワイトボードに書き出す様子。進行を妨げないようにふたり一組で書き出す



## 熱海市の災害復興での活動メンバー (当協会会員) ※五十音順

災害復興委員会メンバー
浅羽 雄介
浦山 絵里 (FAJ内コーディネーター)
遠藤 智栄
鈴木 まり子 (現地コーディネーター) (◎)
疋田 恵子
山田 真司 (◎)

サポーター
飯島 邦子 (◎)
伊藤 春美 (◎)
尾上 昌毅 (◎)
河野 恵
◎印：2021年9月から継続的に活動しているメンバー

※現地コーディネーター：  
依頼元とのやりとりと現地活動のとりまとめ役  
※FAJ内コーディネーター：  
FAJメンバーの日程調整や会計とりまとめ役  
※サポーター：  
近隣エリア在住の過去に災害支援に関わったことがある会員、且つ、平日の支援活動への参加が可能だったメンバー



## 熱海市伊豆山ささえ逢いセンター運営推進会議を 支援頂いて

熱海市長寿介護課 前川 美奈子



令和3年7月の発災から3か月後にささえ逢いセンターを開所しました。設置を決めてから開所まで委託先の熱海市社会福祉協議会と委託元の市とで打ち合わせを行いました。両者の不安感が強く、愚痴の言い合いになりがちなところを、前向きな議論になるよう進めて頂きました。開所後も、センターの運営会議の進行と板書をご支援頂き、ファシリテーターの重要性を実感しました。FAJに進行をして頂くことで、生活支援相談員が発言し易くなり、短時間で会議のフレームが決まる等、効率的な会議進行となりました。私自身も話し合いに集中することが出来て、参加者全員の相互理解も進み、何よりも会議そのものの全体の雰囲気柔らかくなるのを感じました。今後もFAJの皆さんと共に被災者支援を進めてゆきたいと思います。

## 発災から迷走するなかで

熱海市社会福祉協議会 原 盛輝



令和3年7月3日に起こった熱海市伊豆山土砂災害。発災から災害ボランティアセンター運営を行うにあたり、今後どう動けばよいのかまったくわからない状況の中、手探りで闇の中を歩くような思いで活動を開始しました。災害復旧から復興へのカギは行政、社協、NPOとの連携が不可欠であり、どこが欠けても復興への道のは遠くなるものと思っています。この三者の連携を強固にするために始動した情報共有会議では貴協会のファシリテーターに進行をお任せし、課題を整理しながら、それぞれの立場や情報を共有し、復興への手段を考える場としての機能を十分に発揮できたように思います。各機関の情報を単純に並べるのではなく、顔を合わせ言葉にして伝えることを繰り返すうちに、それぞれの思いを結び合わせ、参加者ひとりひとりの被災地復興への思いを一つにさせていただきました。まだまだ復興の道半ばではありますが、暗闇から足元を照らす支援にとっても感謝しています。

## 「つながり」

テンカラセン 代表 高橋一美



2021年7月3日に震災が起き伊豆山地区住民が避難を余儀なくされました。

日々のボランティア活動を通じて感じたのは地域のつながりが気薄になっている事でした。地域と住民が交わりこれからの伊豆山をつくるのは、さまざまな「つながり」だと思い、伊豆山の住人の生の声を聞き、現状を語り合える場『伊豆山を話そう会』を開催致しました。ただ我々にはその場を仕切るスキルが全くなかったので開催に足踏みをしていたところ、他の会で偶然FAJの存在を知りました。まさに我々が求めていた答えがそこにあり、すぐにご相談させて頂いたのを懐かしく思います。

被災地の混乱期に『対話』の必要さ、大切さを学ばせていただいています。また中立な立場のファシリテーターの必要性も凄く感じました。これからも復興と並行してFAJの方々にお力をお借りして『つながり』を絶やさず作っていきたいと思います。よろしくお願い致します！

【特集 2】

# 災害復興支援者のための 「話し合う力」養成講座

～北海道から沖縄までの参加者が集いました！

## 〈講座概要〉

### ◎コース

- ・夜コース 3回連続(2021年12月～2022年1月)
- ・昼コース 3回連続(2022年2月～3月)

### ◎対象

災害復興支援の活動や実践をしている方、または今後災害復興支援に積極的に関わりたい方。特に、自治体職員、社会福祉協議会、支援団体、NPO等の方々におすすめ。

### ◎参加費

9,000円(3回講座+ SNSコミュニティでの交流)

### ◎構成

#### 第1回：

- ・ファシリテーションって何だろう？
- ・意見・アイデアの引き出し方
- ・ふりかえり

#### 第2回：

- ・話し合いの準備
- ・意見・アイデアを整理する
- ・ふりかえり

#### 第3回：

- ・合意形成のコツ
- ・総合演習
- ・マインドも大切に
- ・ふりかえり



講座はオンラインで実施



熊本地震(2016年)



実践現場での事例を元に学び合い

令和3年7月熱海市伊豆山土石流

## 〈参加された方の声〉

- ・シンプルながら基礎的なことをしっかり学べたことがよかったです。
- ・考える時間や話す時間、質問ができる時間が十分な時間配分でした。
- ・講義だけではなく、演習が難しいながらも面白かったです。
- ・普段からこういった学びが大事だと思いました。
- ・スキルだけでなくマインドが大事ということにも共感しました。
- ・講座の後のフリートークの時間があるのもよかったです。

- ・現場での合意形成の具体的な方法を学ぶことができました。
- ・演習や振り返り、質問から学ぶことも多くあったという間の2時間半でした。
- ・町内会や自治会などのコミュニティの話し合いのばで活用したい。
- ・防災活動の話し合いに活かしていきたいです。
- ・常にやさしく迎えてくださり、安心して受講できました。
- ・委員会のみなさんと出会ったことが大きな励みになりました。

災害復興支援の現場では、多様な情報を共有し、支援を調整しながら意思決定することが求められており「話し合う力」は必要不可欠です。

その力を身につけていくには平時からこの「話し合う力」をどれだけ備えられているかが重要です。

今回の「話し合う力」養成講座は、被災地での様々な話し合いを

よりよくするためのスキルと心がけを学び合う場になりました。(FAJ災害復興委員会、遠藤智栄)

## 〈工夫したこと、感じた効果など～講座スタッフより〉 .....

### 「理論と実践のマリアージュ」

- 講師：山田真司

どんなスキルやマインドをもって話し合いに臨めばよいのか、委員会のメンバーと打ち合わせを重ね、コンテンツを練り上げました。構成はシンプルにし、【ファシリテーション理論のレクチャー】→【復興支援現場での実践例の紹介】→【演習で理論を実践レベルに高める】を單元ごとに繰り返すようにしました。

当日の講座では、理論は初心者の方でもわかりやすく丁寧につたえるとともに、実践例の紹介では色々な現場での例を取り上げることで、実践のイメージを持っていただくように心がけました。

各コース10名ほどのご参加をいただき、受講後のアンケートでは、「復興支援の現場での実践に向けて、普段からできることをやっていきたい」など、実践への前向きなご意見をいただいたのが大変うれしかったです。

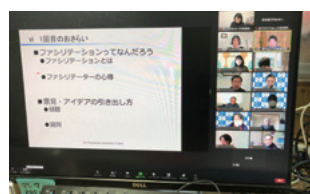
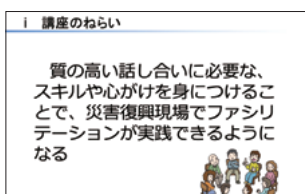
### 「〈チーム力〉も備えの一つ」

- テクニカルスタッフ：浦山絵里

準備段階では、打ち合わせを重ねてプログラムを作ることによって当日のチーム力をつくり、複数回の講座とすることで参加者が知りあう場を重ねていきました。

被災地支援の現場でもチーム力は欠かせませんが、それは一朝一夕にはできません。

この講座では受講された方たちとSNSグループをつくりました。今後何かの時に協力しあえるチームとなれるよう、参加者の皆さんの知見も共有していただきながらさらに学び合い、チーム力を備えていきたいと思っております。



講座は、企画、講師、技術…など多様な役割のチームで運営

### 「実感から生まれた気づきを学びに」

- 事例紹介：鈴木まり子

被災地で話し合う力の必要性が認識されるにしたがって、話し合いを支援できる人材が求められてきました。そこで、災害時の話し合いが有意義になることを願い養成講座を企画しました。今回の講座中は、熱海市伊豆山土砂災害の支援活動中でしたので、よりリアルな事例も紹介できました。受講生のみなさんは、それぞれに現場をお持ちでしたので、グループでの質疑応答時間も具体的に実践につながる質問が多く、多くのヒントを持ち帰っていただけたのではと思います。

### 「申し込みサイト(peatix)の作成及び

#### 参加者と企画チームを繋ぐ」

- 受付サポート：東憲治

今回の講座では、参加者アンケートを丁寧に取りました。そのため多彩な声をいただくことができました。講座運営では、資料やZoomリンクを複数回送り、スムーズに皆さん参加できたことがよかったです。また、Peatix以外からの申込をPeatixでアナウンスして、実際参加者が来たことも嬉しかったですね。たとえ予告であっても、予定が合う日がわかれば、申し込む方がおられることがわかりました。

### 「話し合う力を学ぶ場を陰でサポート」

- 事務局スタッフ：遠藤紀子

講座のコンテンツや講座内で場づくり・ファシリテーションについては企画チームのメンバーが時間をかけて打ち合わせを重ね、情熱を持って取り組んでいて、素晴らしかったと思います。私は学びの場がスムーズに運営できるようにロジ周りの細かい部分を担当しました。peatixからの受講料の支払いが難しい方へのメール連絡やお振込みのご案内などをきめ細かく対応できたことがよかったと思っています。



## [特集3]

## 災害復興委員会10年のあゆみ

災害復興委員会（設立時は災害復興支援室）は2011年3月11日に発災した東日本大震災の直後の3月27日に設置され、2021年3月で活動10年を迎えました。

専従職員がないNPO法人として、ボランタリーに10年間どのような活動を展開してきたのか、また、私たちの活動やファシリテーションが災害・復興支援にどのように寄与してきたのか／できなかったのかなど、本委員会の事務局員として携わってきた視点からこれまでの10年を振り返りたいと思います。

## 災害復興委員会の活動の変遷

## 災害発災初期の活動

日本中に大きな衝撃を残した地震・津波災害ならびに福島第一原子力発電所事故。当時、日本ファシリテーション協会（以下、FAJ）には、ファシリテーションを活用した災害復興支援という機能がありませんでした。このような状況の中で、6名で立ち上げた本委員会が最初に行ったことは、活動方針を決めることと、現地調査をスタートさせることから始まりました。前者は「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」「支援機関同士のネットワーク強化」というもので、今でもこの方針を中心に据え活動を展開しています。また、支援時に「ファシリテーションを振りかざさない」ということもメンバー間で確認しました。後者は仙台在中の設立メンバーを中心に現地の情報を収集するとともに、東京で開催されたNPOや各省庁が集まる会議に参加するなどして情報の収集ならびに他機関・他団体との関係づくりに努めました。



津波被害当時の様子

## 復興支援活動の展開

手探りで開始した支援活動は、多くの人的ご縁をいただきながら、岩手県、宮城県、福島県に加えて全国域の様々な地域で展開することができました。活動の内容も行政と住民の話し合い、住民同士の話し合い、支援団体同士の話し合い、会議やフォーラムのプログラムづくりの支援、支援団体同士のネットワークづくりの支援、復興支援団体のスタッフに向けたファシリテーター養成講座の展開など多岐にわたりました。1回限りの支援もあれば、長期にわたり支援することもありました。今でも以前に関わりをもたせていただいた団体や人を通じて、東日本大震災の支援活動を継続しています。

※活動の詳細等はFAJのWEBサイトを参照ください

## ファシリテーションができる場をつくるということ

支援当初はファシリテーションやワークショップという言葉に馴染みがないせいか、司会進行という程度に受け止められていたことも多くあり、ジレンマを抱えることもありました。それでも、ファシリテーションを活用するために、その役割をこなし、関係を作り出すことで、ファシリテーションへの理解を



JCN現地会議における支援者同士の話し合いの様子(2013年)





ふくしま会議(わかもの会議)における話し合いの様子(2011年)



今なお解決していない福島第一原子力発電所事故の様子

深めていただくことに努めてきました。その結果として、ワークショップのプログラムづくりや会議のファシリテーターを任されることになったのは、いかに信頼関係を構築していくことが大切であるかを物語っていると言えます。ファシリテーションができる場が準備されているのではなく、自ら作り出していくこの大切さを学びました。

一方で、様々な団体がワークショップを各地で展開することで、現地の住民から「ワークショップ疲れ」という言葉を耳にするようになりました。ワークショップを実施することが目的になり、現地の方々が参加させられているという背景が想像できます。また、参加者の前に立ってワークショップの説明をする人がファシリテーターであるという認識が広がったことも否めませんでした。ファシリテーションやワークショップは目的でなく、住民同士がより良い復興を目指すため、また、支援団体同士が連携するための手段であることを意識しながら、現地で活動を展開することを改めて、心がけるきっかけにもなりました。

### 復興支援活動におけるジレンマ

復興支援の難しいところは、そもそも何をもって復興したと言えるのか定義がないことだと考えています。そのために、私たちが行っていることがどのようなことに役立っているのか自問自答しながらの活動でした。また、東日本大震災の復興支援だけに注力するだけのリソースを持ち合わせていない状況でしたので、現地との関わりに限界を感じることも多くありました。委員会内でも、どこまでやるか/やれるかについてはよく話し合ってきました。答えは今も見つかりませんが、私たちが関わらせていただいた場が、参加者にとって「意義のある場であった」「参加して良かった」と思っていただけよ

う心がけることを忘れずに活動を今後も継続したいと考えています。また、私たちがいつまでも関わるより、地域住民の意思で何かが生み出されるような支援に繋げていくことも大切なことだと学ばせていただきました。

### 活動の広がりや今後の課題

10年間の復興支援活動を通じて、多くの団体とのご縁が生まれたことや当時FAJの存在を知らなかった団体から声をかけてもらえるようになったことは、話し合いの重要性やファシリテーションの価値を認めていただいたことであるとも感じています。東日本大震災以降、残念ながら日本の様々な地域で災害が発生しています。私たちの力だけでは、到底対応しきれないことも多くあり、地域で話し合いができる力をつけていくことが課題と考えています。私たちが災害・復興支援のみならず、平時から地域で話し合いができる力を蓄えられるような支援を今後は展開していきたいと考えています。

### 最後に

東日本大震災以降、多くの方々との関わりをもたせていただきました。どういう団体かわからないが知り合いの紹介ということで信用して下さることもありました。また、私たちの提案を受け入れ、一緒に場づくりをしていただいたこともありました。時には、災害・復興支援のことをもっと勉強してから来て欲しいという叱咤激励をいただくこともありました。例を挙げればきりが無いほどの様々な関わりをもたせていただきました。こうした一つ一つの関わりは私たちの財産でもあると考えています。この場をお借りして、感謝申し上げますとともに、引き続きFAJ災害復興委員会をよろしくご願ひ申し上げます。(FAJ災害復興委員会、杉村郁雄)

### □ 丁寧な対話(ふりかえり)をくりかえしたからこそ「伝えたい言葉」が生まれる ～ Voice from 3.11

FAJが災害復興支援の部門を設置した2011年から関わらせていただいているJCN（東日本大震災支援全国ネットワーク Japan Civit Network）では、「10年目にわたしたちの思いと願いを語る～みんなの声を、お聞かせください Voice from 3.11～」という企画が開催されました。Voice from 3.11は、3.11から10年に思いを馳せる、3.11の現状を知る、3.11を次に生かすということを目的とした活動で、全国の被災された方、支援された方それぞれから271ものVoiceが寄せられました。

2021年度はその声をもとに支援に

関わった人が対話を重ね次の世代につなぐ宣言を生み出すワークショップが開催され、委員会では2回のワークショップのグループファシリテーターとして参加しました。

たくさんの想いの詰まった271の言葉から生まれた気づきや今の思いを共有し、「持論」ではなく、ここにある思いを重ねた宣言文をつくるのがこのワークショップの目的でした。集まった支援者の皆さんも、自身の中に生まれる「この10年を経たからの想い」も含めて、丁寧に対話を重ねられていました。

運営されたJCNのみなさんも私たちも、目的に向かって参加者の思いが

いったり来たりを繰り返されるのを丁寧に聴き合い、言葉が醸成されるのを待つワークショップになりました。

是非、報告書を見られている皆さんにも、271の言葉を読んでいただきたいと思います。(FAJ災害復興委員会、浦山絵里)



Voice from 3.11のウェブサイト  
<https://voicefrom311.net/>

### □ 被災地での会議のオンライン化に対応し、見える化のスキルを学び合う ～オンライン記録ボランティア養成講座

令和3年度も8月の豪雨の影響で福岡県や佐賀県を中心に浸水や土砂災害等の被害が発生しました。発災直後からオンラインで開催された情報共有会議では、九州支部および佐賀サロンの有志メンバーが中心となって、オンライン記録ボランティア(情報共有

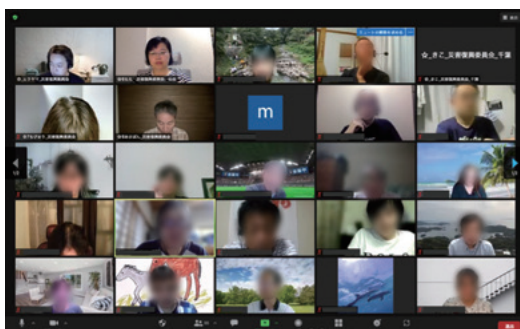
会議で話されていることをオンラインのドキュメント上に記録して議論が見える化するお手伝い)を行っておりました。

災害復興委員会としては、オンラインであれば地域を越えての支援が可能であり、被災した地域外の会員の皆さんにもファシリテーションを使った災害

支援に関わって頂けるのではないかと考え、8月22日(日)20:00から2時間のオンライン記録ボランティア養成講座を開催しました。

当日は約20名の方にご参加いただき、災害時の情報共有会議にはどんな人達

が参加し、どんな話をしているのか、オンライン記録ボランティアはどのように行うのかについて、演習を通して学んでいただきました。聞きなれない言葉が飛び交う事もあり、記録に苦労されている方もいらっしゃいましたが、模擬情報共有会議を体験することで、実際にどのような支援を行うのかイメージができるようになったとの声を多くいただきました。本養成講座を受講された方の中には、早速その後の福岡県情報共有会議で、実際にオンライン記録ボランティアとして支援して頂いた方もいらっしゃいました。(FAJ災害復興委員会、平山猛)



講座当日の様子



## 災害に備えて『話し合う力』を蓄えよう! ～ JVOAD 全国フォーラム分科会

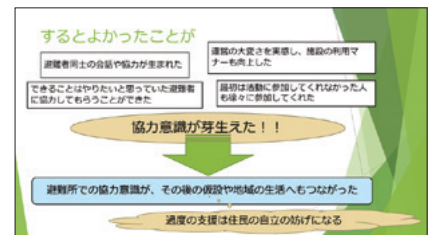
災害の現場では、様々な情報を共有し、支援を調整しながら課題の解決に向けて、意思決定をするということが求められており「話し合い力」は必要不可欠であると考え、JVOADの全国フォーラムで本分科会を開催しました(オンライン開催)。登壇者には、熊本地震(嘉島町)、令和元年東日本台風(台風19号)(長野市)、東日本大震災(陸前高田市)において、話し合うことで災害・復興支援に携わられた方々に登壇いただき、FAJが聞き手となり、登壇者からお話を聞きました。登壇者からは、いくつもの重要な要素が次の通り、出されました。

- 被災当事者が話し合う場を大切にすること

- 会議体と現場のキーマンをつなぐ役割をはたすこと
  - 話し合いから、動きを作り出し、一体感を生み出すこと
  - 特に自身も被災している支援者は自分の感情も大切にすること
  - 日頃から話し合いの体験や実践をしておくこと など
- 私たちFAJも学ぶことが多く、被災



地で活動する際には心がけたい内容でした。最後のコメントにあるように「話し合う力」が地域に蓄えられるよう引き続き、寄与できたらと考えています。その一環として、本分科会の終了後に、参加メンバーを中心にコミュニティを作り「話し合う力」について意見交換を行うなど交流を継続しています。(FAJ災害復興委員会、杉村郁雄)



当日の様子(左)と登壇者の園田ひろみ氏(嘉島町)の資料(右)

## 防災・減災の一環として継続的にサポート ～内閣府「多様な主体間における連携促進のための研修会」

継続的に関わらせていただいている本研修会はFAJ災害復興委員会が防災・減災の一貫として取り組んでいる活動の一つです。災害が多い日本において、災害時に円滑な被災者支援ができるよう平時から体制を構築しておくことをねらいとして内閣府主催で本研修が各地で開催されました。2021年度は参加都道府県状況に合わせて、基礎研修、連携関係づくり研修、中核人材研修(連続3回)の3層に分けて開催されましたが、FAJ

では連携関係づくり研修と中核人材研修の演習パートをサポートいたしました(連携づくり3地域、中核人材3回)。サポートの主な内容は、演習パートのコンテンツ作成、プログラム作成、当日の進行でした。参加者は行政、社会福祉協議会、NPO等の災害支援に関わる部署、団体が参加され、地域の事情にあわせて、リアル、ハイブリッドで行われました。FAJとして心がけていたことは事前の打ち合わせから参加して、コンテンツやプログラムを作りあげ、本

番が終わると振り返りを行い、次に活かすというサイクルを繰り返したことです。災害の直接的な支援ではありませんが、こうした活動を通じて災害支援に少しでも寄与できたらと考えています。(FAJ災害復興委員会、杉村郁雄)



演習では思わず立ち上がって話し合う様子も



## 2021年度 活動一覧

※活動会員数 168人、受益者(会員) 68人、受益者(一般) 1088人、総計 1,324人(いずれも延べ人数)

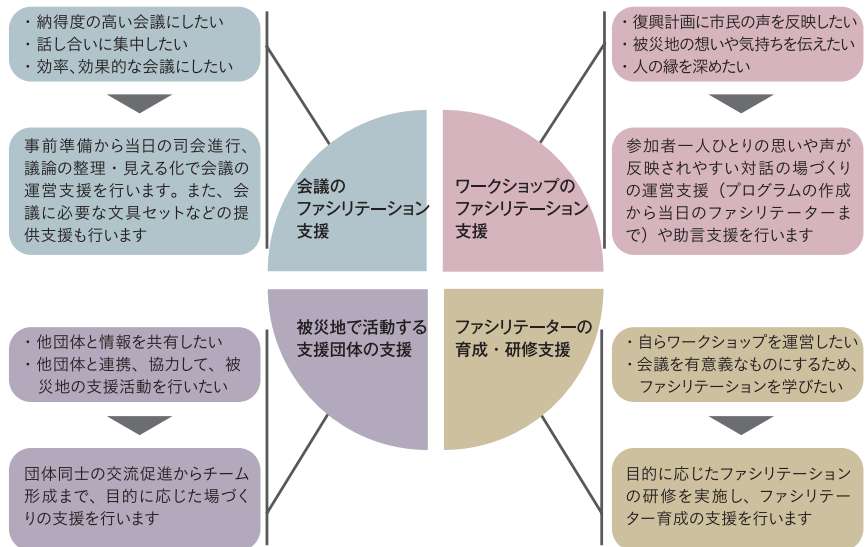
5月27日	JVOAD全国フォーラム分科会(オンライン)	11月26日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)
6月14日	Voice from 3.11 実行委員会ワークショップ(オンライン)	12月3日	伊豆山支え逢いセンター事業拡大会議(静岡県熱海市)
7月7日	第1回熱海市避難所役員会(静岡県熱海市)	12月16日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)
7月8日	第2回熱海市避難所役員会(静岡県熱海市)	12月16日	熱海伊豆山 住民の対話 寄り添い・共有(静岡県熱海市)
7月12日	第3回熱海市避難所役員会(静岡県熱海市)	12月17日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)
7月21日	伊豆山民児協勉強会(静岡県熱海市)	12月23日	話し合う力養成講座Aコース 1回目(オンライン)
7月24日	熱海市災害支援(静岡県熱海市)	1月7日	話し合う力養成講座Aコース 2回目(オンライン)
7月27日	いわて連携復興センター研修(オンライン)	1月14日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)
8月12日	富士市災害ボラセンふりかえり(静岡県富士市)	1月19日	話し合う力養成講座Aコース 3回目(オンライン)
8月22日	オンライン記録ボランティア養成講座(オンライン)	1月21日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)
8月23日	避難所女性対象情報交換会(静岡県熱海市)	1月24日	内閣府「多様な主体間における連携促進のための研修会」(中核1)(オンライン)
8月30日	避難所女性対象情報交換会(静岡県熱海市)	1月27日	内閣府「多様な主体間における連携促進のための研修会」(千葉県)(千葉県千葉市)
9月6日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)	2月8日	内閣府「多様な主体間における連携促進のための研修会」(中核2)(オンライン)
9月6日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)	2月17日	話し合う力養成講座Bコース 1回目(オンライン)
9月16日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)	2月18日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)
9月13日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)	2月18日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)
9月21日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)	2月21日	内閣府「多様な主体間における連携促進のための研修会」(中核3)(オンライン)
9月24日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)	2月24日	内閣府「多様な主体間における連携促進のための研修会」(奈良県)(オンライン)
9月27日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)	2月25日	話し合う力養成講座Bコース 2回目(オンライン)
9月30日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)	3月9日	話し合う力養成講座Bコース 3回目(オンライン)
10月7日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)	3月15日	愛知県情報共有会議(オンライン)
10月8日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)	3月15日	内閣府「多様な主体間における連携促進のための研修会」(徳島県)(オンライン)
10月14日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)	3月18日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)
10月14日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)	3月18日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)
10月20日	静岡DWAT派遣振り返りの会(オンライン)	3月23日	熱海伊豆山 住民の対話寄り添い・共有(静岡県熱海市)
10月21日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)		
10月29日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)		
11月4日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)		
11月8日	熱海伊豆山 住民の対話 寄り添い・共有(静岡県熱海市)		
11月12日	伊豆山支え逢いセンター事業打ち合わせ(静岡県熱海市)		
11月18日	生活再建のための被災者情報共有会議(静岡県熱海市)		

## 日本ファシリテーション協会と災害復興委員会

ファシリテーション(Facilitation)——、人と人、人とコトとの関わり方に働きかけ、集団による学習や問題解決、未来創造などの場においてプロセスと結果がよりよいものとなるよう支援・促進することを意味します。その役割を担うのがファシリテーターで、話し合いの場で参加と相互作用を促す進行役などがわかりやすい例です。

特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会(FAJ: Facilitators Association of Japan)は、ファシリテーションの普及を通じて、多様な人々が協働しあう自律分散型社会の発展を目指し2003年に法人として設立、2004年には内閣府より特定非営利活動法人(NPO)の認証をうけました。2021年6月現在、1,219名の会員が活躍する団体となっています。

災害復興委員会は、2011年3月11日に東北・関東を襲った地震・津波・原発事故の複合大災害直後にFAJ内に設置され、以後、「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」、「支援機関同士のネットワーク強化」を柱に各地で活動しています。



## 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会

### 災害復興委員会 2021年度 活動報告書

2022年6月10日発行

編集 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 災害復興委員会

浅羽雄介、浦山絵里、遠藤智栄、遠藤紀子、杉村郁雄、鈴木まり子、疋田恵子、平山猛、山田真司

発行 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 東京都渋谷区千駄ヶ谷三丁目12番8号 www.faj.or.jp

お問い合わせ(Eメール) fukkou311@faj.or.jp